

文章読解における要旨提示の効果

大 関 嘉 成 幼児教育科

(2012年10月1日受理)

〔 要 約 〕

本研究の目的は、文章読解において、要旨を提示することの効果を検討することであった。読解水準に関して、統語論的レベル、意味論的レベル、実用論的レベルの3水準を採用し、それを測定するための課題を設定した。そして、短大生112名を対象とし、要旨の提示と読解水準との関係を調査した。結果として、要旨を提示することは、読解を促すことが示唆された。

I. 問題

大関(2009、2010、2011)^{1) - 3)}は、文章読解における書き手の主張の読み取りに関する一連の研究を行っている。それは、読み手の性差観や自己効力感を内因として取り上げ、その読解との関係を調査したものであったり、文章の受容度合いと読解との関係を調査したものである。そこで、明確な結果は得られていないわけではあるが、前述の性差観と読解の関係を調査した研究では、文章内容を支持する性差観を保持する読み手は、より深い読解水準に到達することが示唆されている。

さて、その読解水準を測定する尺度として、それらの前研究では、工藤(1993、1997)^{4)、5)}による、「統語論的レベル」、「意味論的レベル」、「実用論的レベル」の3つの読解水準を採用している。工藤(1997)⁵⁾によればその3つの読解水準は次のように説明されている。『統語論』的レベルとは、主として、文を構成する語の形式的関係あるいは、文章を単位にした場合の文およびパラグラフの形式的関係を理解することによって達成できるレベルである。これには、特定の語の他の語による定義の理解から、語の主従関係の理解、文どうしの結合関係の理解、さらに文章全体の論理構造の把握まで含まれる。また、『意味論』的レベルとは、語や文および文章とそれが指し示している具体的事象の関係を理解することで達成できるレベルである。これには、個々の語や文の指示対象の理解から、文章全体の具体的含意の理解まで含まれる。『実用論』的レベルとは、語や文および文章が指し示している意味内容と自らの知識・信念との関係を理解しているレベルである。ここでは、読み取った文章内容によって、自らの既有知識・信念および行動(判断・推理など)が影響される。」

特に実用論レベルの読解水準に到達することは、非

常に困難であることが前研究では明らかになっている。それを工藤(2008)⁶⁾はまた「新しく得られた知識によって推論過程そのものを制御し、新しい推論の方向性を生み出さる水準」と述べ、先行研究の結果からも、容易に到達することは困難な水準として捉えている。

そこで、本研究では、その読解水準への到達を目標とした、試験的なアプローチを行うこととする。そのアプローチとは、文章内容の要旨、つまり筆者の主張を簡潔に読み手に提示することである。なお読解に用いる文章は、事実を列挙したものではなく、大関の前研究と同様、主に書き手の主張が記述されたものを取り上げる。そもそも要旨の読解こそ、前述した類の文章読解においては重きを置かれることになるものであり、直接提示してしまえば、読解にはならないだろうとの批判もあるかもしれない。しかし、意味論レベルまではある程度の読み手が到達できたとしても、実用論レベルまではほとんどの読み手は到達できないという前研究の結果を踏まえると、要旨の提示がそのまま実用論レベルの読解水準を達成させるものになるとは考え難い。工藤(2008)⁶⁾が述べるように、その水準に到達するためには、要旨を理解するのはもちろんのこと、推論過程を操作する必要がある。よって、要旨を提示し、その明確化を図ることは、読み手の負担を軽減し、その水準到達の一助になるのではないかという予想のもと、試験的に行うものである。

なお、本研究においても、前研究同様、工藤^{1)、5)}による、「統語論的レベル」、「意味論的レベル」、「実用論的レベル」の3つの読解水準を採用する。そして、「統語論的レベル」より「実用論的レベル」に読解水準が進めば進むほど、知識は統合され、その知識操作・制御が可能になっていくことから、その理解はより深まっていると考えられるため、「統語論的レベル」より

「実用論的レベル」の読解水準を、より深い水準として記述することにする。

以上を踏まえ、本研究の目的を以下に記す。

目的と仮説

本研究の目的は、書き手の主張が主として記され文章の読み取りにおいて、要旨を提示することが、読み手の読解水準をより深めるのではないかという予想を検証することである。

II. 方 法

1. 被験者

U短期大学1年次学生計123名（男性13名、女性110名）が被験者となった。彼らは全員、今回採用した文章を未読であった。

2. 手続き・概要

研究のための調査は、2011年9月の授業内において、質問紙法により行われた。その回答に要する時間は約40分であった。

実験は、教示、文章読解、事後質問（テストA、B、C）、もう1種の文章読解、事後質問（テストA'、B'、C'）のセッションからなり、連続して行われた。

教示で、文章内容の要旨を口頭で提示した（TABLE 1）。表に示す通り、できるだけ簡潔に、論調を明確に伝達することに配慮した。

TABLE 1 要旨の提示

これからみなさんには2つの文章を読んでもらいます。1つはジェンダー、つまり、男らしさや女らしさに関するもの、もう1つはやる気に関する文章です。それぞれ要旨は次のようになります。

「ジェンダーに関する文章では、筆者は、男らしさ・女らしさは好ましいものとして述べています。また、やる気に関する文章では、筆者は、実際に達成できる目標を設定し、繰り返し達成していくことが好ましいと述べています。」繰り返します。（「」箇所はもう一度教示した）

なお、文章は理解するまで繰り返し読んでもらって構いません。また質問への回答の際は、文章に戻らないで回答してください。

そして、事後質問には読み手の読解水準を測定するために、それぞれ対応して3つの課題（テストA、B、C・テストA'、B'、C'）が設けられた。

なお、本研究では全被験者が同じ条件のもとに読解を行い、続く質問に回答するという方法をとった。分析にあたっては群分けを行わず、大関（2010、2011）²⁾、³⁾の結果との比較をすることによって、目的の検証にあたった。このような方法をとった所以は、授業内で行った実験でありかつ、被験者が読解により得られる利益を享受できるよう配慮したためであった。

3. 質問紙について

(1) 文章（Appendix 文章 参照）

文章には、大関（2009、2010、2011）^{1)–3)}でも採用した、次の2種類を用いた。

1つは、web上のHPに公開されている長尾誠夫の文章「ジェンダー論は妄想の産物」（URL：<http://home-page1.nifty.com/1010/jender.htm>、最終アクセス：2012年9月30日）より、抜粋したものである（1380字）。そこで長尾は、男らしさ・女らしさの大半は望ましい徳目であると述べ、ジェンダーフリーを批判する主張を展開している。以降、こちらの文章を「ジェンダーに関する文章」と呼ぶこととする。もう1つは、同じくweb上のHPに公開されている文章「目標設定し挑戦を楽しむ」（URL：<http://www.motivation-up.com/up/mokuhyou.html>、最終アクセス：2012年9月30日）である（1459字）。その内容は、モチベーションをあげそれを維持する方法は、目標を達成することにこそ意味を見出し、爽快感を得るために実際に達成できる目標を設定しながら、チャレンジと達成を繰り返せる状態にしておくことである、というものである。そしてその結果、何事に対しても結果を出せる体質に生まれ変われる可能性がある、とも述べている。以降、こちらの文章は「やる気に関する文章」と呼ぶこととする。

なお、一部の語句にはルビをふり、難解と思われる語句にはその意味を付した。また、先に読む文章・事後質問のセットを被験者の半数ずつで入れ替えた。

また、文章読解直後には、その理解程度を①理解できなかった、②あまり理解できなかった、③少し理解できた、④理解できた、の4件法で問うた。

(2) 読解水準を測定する課題（Appendix、TABLE 6、TABLE 7 参照）

文章の読み取り後に、その読解水準を測定するための3課題をそれぞれ設置した。これらいずれの課題に回答する際も、文章は読み直さないよう教示した。

①テストA・A' について

テストAは、統語論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された課題である。これに関して工藤（1997）⁵⁾は、「文章の構成要素の形式的関係を問うものが考えられる」としている。そこで本研究では、テキストから抜粋した文章内容あるいはそれを虚偽的に改変したものをほぼ前件と後件を有する命題の形式（「pならばqである。」）で表現し、その命題の正誤判断を問う課題として作成の上、使用した。作成された命題項目とその正答：【正or誤】はTABLE 6、TABLE 7に示されている。得られた回答は正答と照合され、合致した場合ごとに1点が加算され、計0～7点間で

得点化がなされた。

②テストB・B'について

テストBは、意味論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された課題である。これに関して工藤(1997)⁵⁾は、文章の意味内容の理解がそれに基づく正しい予想をするための必要条件であることを踏まえ、文章には直接記述されていない事項を文章内容に基づいて予想させるものが考えられるとしている。そこで本研究では、実験者が作成した5つの項目の中から、それに対応する目標を選択させることとした。テキストに準拠して目標を立てることができていれば、それに類する項目を選択できるはずである。なお、この正答もTABLE 6、TABLE 7に示されている。採点にあたっては、適切な回答1つにつき1点とし、不適切な回答1つにつき1点減点とした。ジェンダーに関する文章に続くテストBは、全5項目中、正答は1項目であることから、この得点は計-4～1点で導かれることとなった。一方、やる気に関する文章に続くテストBは、全5項目中、正答は3項目であることから、この得点は計-2～3点で導かれることとなった。

ただし、これらの選択肢は、個人間で捉え方にばらつきがあることが考えられることから、実験者が正答になりうるだろうと想定して作成した目標項目も、それに反して回答される可能性が考えられた。そこで、この得点は平均を算出して、相対的な比較により分析することとした。

③テストC・C'について

テストCは、実用論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された課題である。これに関して工藤(1997)⁵⁾は、文章内容と矛盾する既有知識と読解した文章内容というあらたな項が付け加わるといった既有知識の変化が生じた上で、文章内容と既有知識との関係をその課題への回答に反映させることを要求するものを挙げている。こういった特定の言語行動を要求する課題は、工藤(2008)⁶⁾によって「誤前提課題」としてまとめられている。工藤によれば、「誤前提課題」とは、「学習材料の内容と矛盾する誤った前提にもとづく質問に対して答えるよう、学習者に求める形式の課題」である。また、その課題に正しく回答するためには、「新しく得られた知識によって推論過程そのものを制御し、新しい推論の方向性を生み出しうる水準に到達していなければならない」とも述べている。

本研究でも、上述の言語行動を要求するために、文章の主張内容と反する前提に基づく質問に対して答えるよう読み手に求める形式を採った。大関(2009)¹⁾ではこれを「反意前提課題」と命名している。すると今回、テストCは反意前提課題となり、この課題に正

答できれば深い読解水準に到達したとみなすことができることになる。

III. 結果

1. 分析にあたって

まず、欠損値のあるものを分析対象から除外した。すると、分析対象者は、計112名(男性13名、女性99名)となった。

また、文章読解後に被験者が評定した自身の理解程度(4件法)の平均は、「ジェンダーに関する文章」で $M=2.17$ ($SD=0.68$)、「やる気に関する文章」で $M=3.03$ ($SD=0.65$)となった。検定の結果、「やる気に関する文章」の方がより理解できたと有意に評定されていた($t=-9.61$, $df=222$, $p<.01$)。要旨を提示し、さらに理解するまで繰り返し読むように教示したわけではあるが、「ジェンダーに関する文章」は難解に捉えられたと考えられる。被験者の自己評定に差は生じたが、実際の読解水準に関して、以降、確認していくこととする。

2. それぞれの文章における読解水準

(1) 「ジェンダーに関する文章」の読解水準を測定するテストの採点

まず、事後質問として設置された被験者の読解水準を測定する課題(テストA、B、C)は、次のように採点された。

テストAは統語論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された、7命題の正誤判断を問う課題であった。得られた回答を正答に照合して得点化したところ、平均 $M=5.13$ ($SD=1.22$)となった。そこで、6点以上のものを「高」とし、5点以下のものを「低」とした。

テストBは意味論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された課題であった。得点を算出して平均を求めたところ、 $M=-0.04$ ($SD=1.27$)となったことから、0点以上のものを「高」とし、-1点以下のものを「低」とした。

テストCは実用論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された課題であった。回答の正誤分類にあたっては、「ジェンダーに関する文章」で述べられている主張(「ジェンダーフリー」や『らしさ』を否定すること)の弊害、性差を認めること等をその回答に含めているものが正答と判断され、それ以外の回答は誤答と判断された。

以上より導かれたそれぞれの回答を分類し、テスト間の関係を示したものがTABLE 2である。

(2) 「やる気に関する文章」の読解水準を測定するテストの採点

まず、事後質問として設置された被験者の読解水準を測定する課題（テストA'、B'、C'）は、次のように採点された。

テストA'は、7命題の正誤判断を問う課題であった。得られた回答を正答に照合して得点化したところ、平均 $M=5.59$ ($SD=1.05$) となった。そこで、6点以上のものを「高」とし、5点以下のものを「低」とした。

テストB'は、得点化して平均を求めたところ、 $M=1.55$ ($SD=1.28$) となった。そこで、2点以上のものを「高」とし、1点以下のものを「低」とした。

テストC'は、「やる気に関する文章」で述べられている主張（「達成できる目標を立て、その挑戦を楽しんで実際に達成していけば、モチベーションは維持される」）をその回答に含めているものが正答と判断され、それ以外の回答は誤答と判断された。以上より導かれたそれぞれの回答を分類し、テスト間の関係を示したものがTABLE 3である。

(3) 読解水準

TABLE 2 「ジェンダー」(人数)

| テストC | 正答 | | 誤答 | | |
|------|----|-----------|----|-----------|----------|
| テストB | 高 | 低 | 高 | 低 | |
| テストA | | | | | |
| | 高 | <u>10</u> | 7 | <u>20</u> | <u>7</u> |
| | 低 | 15 | 6 | 34 | 13 |

TABLE 3 「やる気」(人数)

| テストC | 正答 | | 誤答 | | |
|------|----|----|----|----|----|
| テストB | 高 | 低 | 高 | 低 | |
| テストA | | | | | |
| | 高 | 14 | 11 | 23 | 17 |
| | 低 | 4 | 11 | 18 | 21 |

「ジェンダーに関する文章」では、テストAで44名(39%)が「高」に分類され、テストBで79名(71%)が「高」に分類され、テストCでは38名(34%)が正答に分類された。一方、「やる気に関する文章」では、テストAで65名(58%)が「高」に分類され、テストBで59名(53%)が「高」に分類され、テストCでは33名(29%)が正答に分類された。

被験者自身の文章内容の理解程度の評定では、「やる気に関する文章」の方がより理解できたと有意に評定されていたが、それぞれのテストから導かれた読解水準を見る限り、いずれの文章においても被験者は、同程度の読解水準に到達していたと考えられる。

さて、工藤(1993, 1997)^{4), 5)}は、読解の3水準間に

一定の論理的関係を想定している。すなわち、統語論的レベルの達成が意味論的レベル達成の必要条件であり、意味論的レベルの達成が実用論的レベル達成の必要条件であるという想定である。大関(2010, 2011)^{2), 3)}では、その読解水準の論理的関係とはほぼ類似した結果が得られていた。

そこで論理的関係との完全な一致を示す数字に、それぞれ下線を付した。すると、「ジェンダーに関する文章」では50名(45%)が、一方、「やる気に関する文章」では75名(67%)が想定される論理的関係と完全に一致した回答パターンを示していることが確認できる。大関(2010, 2011)^{2), 3)}では、論理的関係との一致が8割以上示されているわけであるが、今回、同様のテストを採用したにも関わらず、それほど高い一致率は得られなかった。このことから、特にテストCに正答できたものは、もちろん皆が実用論的レベルに到達したわけではなく、論理的関係と一致した者のみを深い読解水準に到達した者として着目すべきであろう。結果として、「ジェンダーに関する文章」では10名(9%)が、一方、「やる気に関する文章」では14名(13%)がより深い読解水準に到達したと考えることができる。テストCに正答できたその他の者は異なる要因に依るものと推測される。

3. 先行研究との比較

では、同様の文章と読解水準を測定する課題を用いて行われた大関(2010, 2011)^{2), 3)}の結果と比較して、本研究における被験者の読解水準はどのような様相を呈しているのだろうか。それぞれの文章について、先行研究と比較しながらパーセンテージで示したものがTABLE 4、TABLE 5である。上段が本研究の結果、下段は先行研究の結果となっている。また、大関(2010)²⁾の数値は、当研究における性差観別の分析によるところから引用する。

なお、先行研究の目的は本研究とは異なるものではあるが、文章は同一のものであることはもちろん、各テストの採点や回答の正答・誤答判断も概ね同様の方法で行っており、特に実用論的レベルの読解の達成度を測定するために設定された課題（本研究におけるテストC・C'）では、全く同じ方法で回答の分類が行われている。

「ジェンダーに関する文章」では、先行研究でも同様に理解度に関する評定を行っているが、本研究では、 $M=2.17$ ($SD=0.68$) であり、一方、大関(2010)²⁾では $M=2.34$ ($SD=0.69$) であり、そこに差は認められなかった($t=-1.80$, $df=200$, $n.s.$)。なお、「やる気に関する文章」については、先行研究で理解度に関

TABLE 4 「ジェンダー」 (%)

| テストC | | 正答 | | 誤答 | |
|--------------|---|----------|---|-----------|-----------|
| テストB | | 高 | 低 | 高 | 低 |
| テストA | | | | | |
| 本研究 | 高 | <u>9</u> | 6 | <u>18</u> | <u>6</u> |
| | 低 | 14 | 5 | 30 | <u>12</u> |
| 大関 (2010) | 高 | <u>3</u> | 0 | <u>16</u> | <u>55</u> |
| | 低 | 0 | 3 | 10 | <u>10</u> |

TABLE 5 「やる気」 (%)

| テストC | | 正答 | | 誤答 | |
|--------------|---|-----------|----|-----------|-----------|
| テストB | | 高 | 低 | 高 | 低 |
| テストA | | | | | |
| 本研究 | 高 | <u>13</u> | 10 | <u>21</u> | <u>15</u> |
| | 低 | 3 | 3 | 16 | <u>19</u> |
| 大関 (2010) | 高 | <u>7</u> | 7 | <u>27</u> | <u>28</u> |
| | 低 | 0 | 2 | 8 | <u>21</u> |

する評定が行われていなかったため、その比較はできない。

結果として、論理的関係が一致し、より深い読解が達成できたと考えられる被験者は、「ジェンダーに関する文章」では、先行研究が3%、本研究が9%、一方、「やる気に関する文章」では、先行研究が7%、本研究が13%となり、本研究では割合的にみて倍程度以上の者が先行研究の結果より深い読解水準に到達できたと考えることができる。

鋭敏な結果は得られなかったが、要旨を提示することは文章の読解を促すということを示唆する結果といえよう。

IV. 討論

本研究の目的は、書き手の主張が主として記された文章の読み取りにおいて、要旨を提示することが、読み手の読解水準をより深めるのではないかという予想を検証することであった。

その検証に際しては、大関 (2009, 2010, 2011)^{1) - 3)} で使用された「ジェンダーに関する文章」と「やる気に関する文章」を読み物として再び取り上げ、実験者は被験者が読解に臨む前にそれぞれの要旨を教示した。それぞれの文章の読解後、被験者はその読解水準(「統語論的レベル」、「意味論的レベル」、「実用論的レベル」)を測定する課題(テストA・B・C、テストA'・B'・C')に取り組んだ。

そして、上記の先行研究に比して、より深い読解水準に到達した被験者の割合が増加したという結果が得られた。この結果は、文章読解に際して、その要旨を

予め提示することは、読解を促すことを示唆するものといえよう。

しかし、先行研究に比して、読解水準の論理的関係との一致を示す者の割合は減少した。TABLE 4、TABLE 5 をあらためて見ると、実用論的レベルの読解水準を測定する課題であったテストC・C' に正答者できた者で、論理的関係とは一致しない者の割合がいずれの文章の読解においても増加していることが確認できる。そこで、テストC・C' で得られた正答・誤答を見直してみたところ、ある傾向がみられた。それは、実験者が提示した要旨の論調をそのまま当てはめて回答した様子が窺えるということと、テストC・C' つまり反意前提課題を誤読したため誤答した被験者が多かったということである。

まず後者について考えてみる。そもそも反意前提課題とは大関 (2009)¹⁾ で命名された課題であり、工藤 (2008)⁶⁾ の誤前提課題のように、「学習材料の内容と矛盾する誤った前提にもとづく質問に対して答えるよう、学習者に求める形式の課題」と同様の言語行動を被験者に課すものである。そして、今回みられた課題の誤読とは、課題の間は文章の主張と矛盾する前提を示しているにも関わらず、ジェンダーフリーをジェンダー、高い目標を実現可能な目標と逆方向に読み替えてしまうといった、つまり反意前提課題を成立させなくするというものである。すると一方的にジェンダーの良さ、実現できる目標の意義について回答することになってしまい、課題の間における中学生の質問には対応しないものとなってしまう。もちろん、推論過程そのものの操作もそこには発生しえなかっただろう。

次に前者について考えてみる。若干名の被験者においては、反意前提課題の中学生の質問に対し、明確に「そんなことは書かれていない」と反論する旨の記述もみられ、結果、それは正答として分類された。他にもそこで、文章の主張と矛盾する前提(ジェンダーフリーや実現の困難な高い目標設定)を含みながら、最終的には文章中で述べられている主張、すなわち要旨に準じて回答できたものも正答として分類された。しかしこれは、実験者が提示した要旨の論調に加え、中学生の間に対応するように記述すれば今回の基準だと正答となってしまったため、読解によって主張の理解が促され回答できたのか、提示された要旨のみに基づいて回答したのか、判断が困難なものとなる。なお、この解決にあたっては、「具体例をあげながら説明せよ」といった文言を課題に含み、主張が実を得て理解されているかを確かめる方法が考えられる。

以上2点を考慮すると、要旨を提示することは反意前提課題の間、そのものの誤読を誘発するものとも考

えられ、また、誤読しなくとも要旨を参照するだけで今回の基準のような場合は正答に到達してしまうという懸念が生じる。実際、読解水準の論理的関係とは一致しない、しかし実用論的レベルを測定する課題に正答できている者が増加したことから、実際はそのレベルに到達していない可能性が高いわけであり、よって、読解ではなく要旨提示の効果に依るものであると考えることができる。

本研究でも読解水準を測定するために、先行研究で用いた尺度を使用したわけであるが、結果から、文章読解における要旨を提示する効果を検討するためには、課題の間、または課題そのものを改変、もしくは差し替える必要があることが今後の課題として明らかとなった。

今回、文章読解における要旨を提示する効果の存在は少なからず確認できたため、読み手の内因との関連性に着目しながら、読解支援の方略の検討を重ねていくことが、継続する課題である。

引用文献

- 1) 大関嘉成 (2009). 読み手の価値判断基準となる信念と読解水準との関係 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第57集第2号, 133-149.
- 2) 大関嘉成 (2010). 読み手の価値判断基準となる信念と読解水準との関係 (Ⅱ) —測定尺度を改善して— 羽陽学園短期大学紀要第8巻第4号, 110-128.
- 3) 大関嘉成 (2011). 読み手の自己効力感と読解水準との関係 羽陽学園短期大学紀要第9巻第1号, 57-64.
- 4) 工藤与志文 (1993). 科学読み物の読解に及ぼす誤った知識の影響 読書科学, 37, 68-76.
- 5) 工藤与志文 (1997). 文章読解における「信念依存型誤読」の生起に及ぼすルール教示の効果—科学領域に関する説明文を用いて— 教育心理学研究, 45, 41-50.
- 6) 工藤与志文 (2008). 「誤前提課題」を評価課題として用いた教授学習実験の概観と展望 教授学習心理学研究, 4, 40-49.

Appendix

文 章

「ジェンダーに関する文章」

ジェンダーとは生物学的に規定された性「sex」ではなく、社会的文化的に規定された性差「gender」を意味している。こうした「ジェンダー」の概念は、

60年代から70年代にかけてアメリカで起きたウーマンリブ運動を発端としている。

女性が男性に支配されているという「性支配」体系を構築したウーマンリブ運動は、その支配構造から女性を解放するために、社会的制度における同等な権利を得る運動を展開する。やがて、これが一定の成果をおさめると、今度は「男女」という枠組み自体に差別構造が内在しているという認識に至り、これを抹消しない限り真の解放はないと考えるようになる。ジェンダーとは、生物学的性の差異ではなく、人間が人為的に作り出した社会的文化的性差であり、支配者（男）が被支配者（女）を統治するための道具であるというのだ。こうして、「男女」という枠組み、すなわち「男・女らしさ」を撤廃しようとする動きが生じた。これがジェンダーフリーである。

しかし、ここにはいくつもの誤謬（誤り）がある。その最たるものが、ジェンダーのほとんどが社会的文化的に作られたものだという認識である。こうした考えはM・フーコーの『性の歴史』やJ・バトラーの『ジェンダートラブル』等による「性欲や性別は歴史的社会的に構築された観念的カテゴリーであるという」分析に拠っているが、最近の脳生理学はこうした“思い込み”を見事に一蹴している。医学の専門書には、いわゆる「男・女らしさ」が脳の構造的差異や男性ホルモン（アンドロゲン）の有無によって生じることが明確に書かれている。ジェンダー論者がいかに言質（証拠）を弄してもこうした学問的事実によって、その論理は根底から覆されるのだ。

もちろん、現在の「らしさ」には男女の生得的特質から派生したジェンダー（社会的文化的性差）があるのは確かである。しかし、これらは安定した社会を築くために醸成された文化、あるいは慣習というべきものであり、全否定すべき根拠はどこにもない。たしかに「女は～してはならない」とか「女のくせに」といった行動規制（因襲）や男尊女卑的な発想は排除されるべきだが、一般に言われる「らしさ」の大半は望ましいものである。「男らしさ」には“我慢強さ”や“逞しさ”“責任感”、“女らしさ”には“優しさ”や“繊細さ”“母性的包容力”等があることから、それは明らかだろう。こうした「らしさ」を、「ジェンダー＝悪しきもの」という一面的な見方によって否定すれば、望ましい徳目が消えていき、人間性の荒廃を招くのは必至であろう。

こうした批判に対しては次の反論がある。「らしさ」という枠が存在する限り、その枠に入り切らない個を阻害することであり、それは「差別」につながるというのだ。しかし、「らしさ」に入らない少数の個が

あるからといって、望ましい徳目を含むすべての「らしさ」を否定するというのは、少数による全体支配——すなわちファシズムと同根の発想である。肝心なのは、「らしさ」を否定するのではなく、多様な価値観を許容することであろう。

ジェンダー論者は抑圧からの解放を叫ぶが、「らしさ＝内的規範」なき自由は放縦（勝手気ままにすること）に過ぎず、放縦が蔓延すれば社会は容易に荒廃する。このように、ジェンダーフリーの背後には、モラルを低下させ社会を荒廃へと導く強烈な「毒」が隠されているのである。

「やる気に関する文章」

○目標設定し挑戦を楽しむ

皆さんこれまでに何度となく「夢や目標を持ちなさい」ということは聞かされてきたことと思います。そしてもちろん、それはとっても良いことなんだろうということも想像できるはずです。しかし、その夢や目標を達成できなかったことも多いのではないのでしょうか。なぜでしょうか？それは本当に心から望んだ夢や目標ではなかったからです。夢や目標は本当に心から望むものでなければ、持ったところでまず達成できません。夢や目標というからには、自ら努力をしていかなければ達成できないレベルのものを設定しているはずにも関わらず、努力を継続するモチベーションが保てないからです。しかも、これを繰り返すと「自分は目標を決めても達成できないダメな人間だ」というレッテルを自らに貼ってしまう危険性があります。

○本当に望んでいない夢や目標は設定しない方が良いでしょう？

では、夢や目標はしっかりと心から望むものを設定しなくてはダメで、軽い気持ちで設定すべきではないのでしょうか？軽い気持ちで設定すると負けグセがついてしまう負の作用を及ぼしかねないのは事実です。どうせ達成できないなら、目標を達成できなかった敗北感を味わうよりは、そもそも目標を立てないほうが良いかもしれません。

○挑戦を楽しむために目標を設定する

しかし、夢という大きなものはじっくり見つけるとしても、やはり目標を立てないと自分がどこを目指す

のかわからなくなってしまう。目標がなく、やみくもに頑張っても効率が悪い上にやはりモチベーションは上がらないでしょう。望んでいない目標でも、無いよりはあったほうが良さそうです。では心から望んでいる目標が持てなかったらどうすれば良いのでしょうか？この場合は、“達成したときの爽快感を得る”ために目標を設定し、そのために努力するという風に考えるとモチベーションが上がりやすくなります。

「自分に対する課題への挑戦を楽しむ」といったイメージです。例えば、こんなことを想像してみるとわかりやすいかもしれません。

- ・陸上の選手というわけでもないが、体育の授業の100m走で前回負けたA君に勝つ。
- ・自宅から駅に行くまでの道のりで、一回も信号に引っかからないように行く方法を見つける。
- ・やっていて全く面白くないゲームだが、なんとか我慢してクリアする。

これらは、一見意味が無く本人にとってもメリットはあまり無いかもしれないが、やっている当人は、「与えられた課題を達成するために」精一杯頑張っているはず。これと同じように、意味のある目標を見つけるのではなく、目標を達成することに意味を見出すわけです。これができればモチベーションは上がるとともに、何事に対しても結果を出していく体質に生まれ変わるはずですよ。

○ワクワク感と共に分泌されるドーパミン

幸福感の元といわれる脳内物質のドーパミンは、ワクワク感とともに分泌されます。何かを始めるときのワクワク感や、達成した快感などで多く分泌されるようです。達成の後はドーパミンの分泌量は減っていきませんが、次のチャレンジをすることでまたドーパミンが分泌されます。達成したときの「やったぞ！」という快感が次の「頑張るぞ！」にもつながりますから、チャレンジと達成を繰り返すことが、常にドーパミンが出ている状態を保っていくことにもなります。常にドーパミンが出ているということは、幸福感と高いモチベーションを共に維持している状態ということです。このチャレンジと達成というサイクルをうまく回すように努力してみましょう。

TABLE 6 読解水準を測定する3課題（ジェンダー）

| テストA | 正答 |
|--|-------|
| 1 ジェンダーフリーとは、「男・女らしさ」を撤廃しようとするものである。 | 【 正 】 |
| 2 現在の「らしさ」には、安定した社会を築くために醸成された文化、あるいは慣習というべきものがある。 | 【 正 】 |
| 3 行動規制（因襲）や男尊女卑的な発想も時には必要である。 | 【 誤 】 |
| 4 一般に言われる「らしさ」の大半は望ましいものである。 | 【 正 】 |
| 5 「らしさ」を、「ジェンダー=悪しきもの」という一面的な見方によって否定すれば、望ましい徳目が消えていく。 | 【 正 】 |
| 6 「らしさ」の半数は否定されることがあっても、多様な価値観を許容することが肝要である。 | 【 誤 】 |
| 7 「らしさ」なき自由は、社会に荒廃をもたらす。 | 【 正 】 |

テストB

「読み物」の内容に準ずるならば、「社会を荒廃させるもの」としてどのようなものが考えられますか。適切なものを以下からすべて選び、その番号に○つけてください。

- ①男性が仕事に精を出すこと。
- ②女性が優しさを失ってしまうこと。
- ③男の子はけがをしても、我慢して泣かないようにすること。
- ④女性はよき母になること。
- ⑤細やかな気配りができる女性が増えること。

【実験者が正答として設定したものは、②】

テストC

ある中学生に「読み物ではジェンダーが悪いものとして述べられていましたが、それはどうしてなのですか？」と尋ねられたら、あなたはどうか答えてあげますか。あなたが知っていることを全部使って、できるだけ詳しく教えてあげるつもりで、その答えを書いて下さい。

TABLE 7 読解水準を測定する3課題（やる気）

| テストA' | 正答 |
|---|-------|
| 1 努力を継続するモチベーションを保てないと、夢や目標の達成は難しい。 | 【 正 】 |
| 2 目標は無理に立てなくてもよいが、やみくもにがんばることが大切である。 | 【 誤 】 |
| 3 高い目標を設定することが、モチベーションをあげるのには効率的である。 | 【 誤 】 |
| 4 目標を達成できなかったときの敗北感を味わうことも大切である。 | 【 誤 】 |
| 5 目標を達成することに意味を見出せるようになれば、何事にも結果を出せる体質に生まれ変わるはずである。 | 【 正 】 |
| 6 チャレンジと達成を繰り返すと、ドーパミンの分泌量は減っていく。 | 【 誤 】 |
| 7 ドーパミンは幸福感と高いモチベーションの元である。 | 【 正 】 |

テストB'

「読み物」の内容を踏まえ、「達成したときの爽快感を得る」・「自分に対する課題への挑戦を楽しむ」ために設定されたであろう目標として適切なものを以下からすべて選び、その番号に○つけてください。

- ①できるだけ毎日体重を量り、記録することにする。
- ②今夜はテレビを見ないで過ごすことにする。
- ③数年以内に国会議員になる。
- ④ノーベル賞を受賞する。
- ⑤1日1つゴミをひろう。

【実験者が正答として設定したものは、①・②・⑤】

テストC'

ある中学生に「読み物では、高い目標を設定して努力していくと、モチベーションがあがりやすくなると書かれていましたが、それはどうしてなのですか？」と尋ねられたら、あなたはどうか答えてあげますか。あなたが知っていることを全部使って、できるだけ詳しく教えてあげるつもりでその答えを書いて下さい。

SUMMARY

Yoshimasa OZEKI:

The Effect of Showing a Summary in Text Reading Comprehension

The aim of this study was to examine the effect of showing a summary in text reading comprehension. In order to measure a reading comprehension level, three comprehensive levels (a syntactic level, a semantic level, a pragmatic level) were adopted. Subjects were junior college students (male; 13, female; 99). AS a result, it was suggested that showing a summary is to develop reading comprehension.

(Uyo Gakuen College)